

早稲田大学ラグビー蹴球部が日本ラグビーに与えた影響

Waseda rugby football club effects for Japan rugby

1K05B181

指導教員

主査 石井昌幸先生

橋本 樹

副査 寒川恒夫先生

序論

私は今現在、早稲田大学ラグビー蹴球部に所属している。私は大学入学時からの四年間、この早稲田大学ラグビー蹴球部の一員として活動してきた。部の仲間達と切磋琢磨し、勝利の喜びや敗戦の悔しさなどを乗り越え、昨年は大学選手権優勝を果たし、大学日本一になることができた。

またその中で、日常生活では味わうことの出来ない非常に多くの貴重な経験を味わうことができた。

その様な活動をしていく中で私が感じたことは、早稲田の中に流れる伝統の力強さ、早稲田大学ラグビー蹴球部の日本ラグビー界への影響力というものであった。早稲田大学ラグビー蹴球部は日本ラグビーを創世記から支えてきた歴史と、それによって育まれてきた伝統が脈々受け継がれてきている。そのため今回この卒業研究の場を借りて、早稲田大学ラグビー蹴球部がどのような活動をし、どのように日本ラグビー界に影響を与えていったのか、またこれからどのような影響を日本ラグビー界へ与えていくことができるのかについて探求していきたい。

第 1 章 早稲田大学ラグビー蹴球部の歴史と日本ラグビーへの影響

まず早稲田大学ラグビー蹴球部の歴史に触れてゆく前に、早稲田大学ラグビー蹴球部が創部する前までの日本のラグビーの歴史について簡単に触れてから話を進めていく。日本のラグビーフットボールの歴史が始まるのは、明治 32 年、西暦 1899 年のことである。この年、慶応義塾の英語

教師に新任したイギリス人、イ・ビ・クラーク (Edward Bramwell Clarke) が、ケンブリッジ大学で自らが体験したラグビー競技を、同大学でラグビープレイヤーであった田中銀之助の協力の下、塾生に直接指導したのが、その最初である。しかし明治 43 年に京都の三高が、翌 44 年に同志社が、それぞれラグビーを始めるまで、創始以来 11 年間は慶応義塾以外に日本人チームは皆無で、ひとり慶應義塾だけが独力をもってこの競技を護り続けた。その間、対外試合の相手としては、横浜外人 (Yokohama Country and Athletic Club、Y.C.&A.C.) だけが唯一の対戦相手だった。早稲田大学ラグビー蹴球部が創部する以前の日本ラグビーは、チーム数が非常に少なく、対戦相手を探すことにも苦労が多かったようである。そのためラグビー人気などというものはなく、一般からの認知は非常に少なかったであろうことが容易に想像される。この後に、早稲田大学にラグビー蹴球部が創立する訳だが、その早稲田大学ラグビー蹴球部がどのような影響を日本ラグビーに与えていくのかということを、時代別に分けてその時代にどんな影響を与えたのかについて触れていく。

第 2 章 早稲田大学ラグビー蹴球部を代表する人物達と日本ラグビーへの影響

早稲田大学ラグビー蹴球部は、部としての活動だけが日本ラグビーに影響を与えたのではなく、早稲田大学ラグビー蹴球部関わってきた人物達が日本ラグビーに大きな影響を与えてきた。ここでは大西鉄之祐監督、宿沢広朗氏の二人の人物を取り上げ、この二人の人物がどのように活動し、

どのような影響を日本ラグビーに与えたのかについて触れる。

第3章 近年の早稲田大学ラグビー蹴球部の活動が与える日本ラグビーへの影響

近年の早稲田大学ラグビー蹴球部の活動がどのような影響を与えているのかについて、ここでは触れている。清宮克幸監督、中竹竜二監督の時代について触れ、その時代にどんな活動をし、どのような影響を日本ラグビーに及ぼしたのかについて触れている。

結章

早稲田大学ラグビー蹴球部が、日本ラグビーに大きな影響を与えてきたのは未来を見据えたチャレンジ精神が伝統的に備わっていたからであった。これからの日本ラグビーに貢献するためには、このチャレンジ精神を持ち続けることが重要であり、WASDA CLUB などの活動にや、試合に勝ってメディアにラグビーをアピールすることでラグビーの人気回復や日本ラグビーへの貢献に繋がるだろう。